

第7回(2012. 9. 6 配信)

篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

大和魂と大和心

「大和魂」とか「大和心」などという言葉がよく使われます。この違いを多くの人たちに聞いてみたのですが、「大和魂」とは「日本古来の伝統的な精神」と言われて、明治以降「国のためにつくす心」で、「大和心」とは「日本人らしい素直な心」という意味だと、ほとんどの人が言います。また、「大和心」の方が「大和魂」に比べて優しい感じがするという人も多いようですが、それは本居宣長が詠んだ「敷島の大和心を人問わば朝日に匂う山桜花」という歌の影響であろうと思われます。間違いではありませんが、どちらの言葉も本来は同じ意味の言葉なのです。この二つの言葉は平安時代から使われたようですが、現在ではその当時とはかなり違った意味になってしまいました。

「大和魂」という言葉をはじめて使ったのは、紫式部が『源氏物語』の中においてです。当時中国から入ってきた知識や学問をそのまま使うのではなく、日本の実情に合わせて使うべきであるという意味だったのですが、江戸時代になって本居宣長により、「日本固有の心」という意味が附され、だんだん国粹主義的な言葉に変わっていきました。

「大和心」は日本人の精神の象徴であると言われ、南北朝時代の忠臣といわれた楠木正成(くすのきまさしげ 1294～1336) (※1)のように、天皇に忠誠を誓い桜の花のように美しく散るのが武士だということで、「花は桜木、人は武士」という言葉が江戸時代から太平洋戦争時まで教育の場でも使われてきました。

その結果、学校はじめ日本全土に桜の木が植えられました。そして「大和魂」も「大和心」も軍国主義的な言葉に使われるようになって、多くの人々が太平洋戦争で爆弾を抱えて敵の艦隊や敵陣に体当たりしていった悲しい歴史があります。毎年花見に浮かれている若者たちは、こういった暗い過去を知っているのでしょうか。「そんなことは関係ねえ」と嘯く若者もいるかもしれませんが、日本各地に桜の花が植えられている理由くらいは知っておいた方がいいと思います。

(※1)楠木正成

楠木正成は後醍醐天皇の挙兵に参陣して戦った武将で、足利尊氏や新田義貞などと共に鎌倉幕府を倒しました。その後、足利尊氏追討の命を受けた新田義貞に従い、わずか 700 騎で数万の足利軍を湊川(現在の神戸市)で迎え討ち、激戦の末亡くなりました。南朝方の楠木正成は朝敵となりましたが、その後赦免されて、江戸時代には忠臣として讃えられるようになりました。

湊川の決戦に赴く楠木正成は、敗戦を予想していたといわれ、父に従おうとする嫡男の正行(まさつら)に「生き延びて再起を期せ」と諭して帰す「桜井」の情景をうたった「青葉茂れる桜井の……」という歴史歌「桜井の決別」は、多くの日本人の心をとらえ親しまれてきました。なお、桜井は現在の大阪府にあった西国街道の宿駅だったと言います。

右近の橘と左近の桜

京都御所の紫宸殿(ししんでん)の庭には、向かって右に桜の木、左手に橘の木が植えられています。これらの木は「右近の橘、左近の桜」と呼ばれています。御所の中を見たことがない人でも、3 月に家庭で飾るひな段にもひな道具の一つとして、左右に飾られていますから知

っている人も多いのですが、橘と桜は、どちらが右側だったか左側だったか混乱している人や、「右近の桜」と記憶している人も多く、なかには、「ウコンザクラ」という淡い鬱金色をした花を咲かせる桜を「右近の桜」だと思いこんでいる人もいます。また「位置が反対だ、右近の橘だから向かって右にあるのが橘だろう」と文句を言う人がいますが、天皇は紫宸殿において南を向いて座っていました。寺に安置された本尊などもそうですから、ほとんどの寺院仏閣は南に正門があるわけです。したがって、天皇から見て右とか左とか言うわけです。

「右近の橘」と呼ばれたわけは、紫宸殿南側の階段下の西の方に「右近衛府(うこのえふ)」の衛兵が警護していたことから、「右近の橘」と呼ばれました。その反対側に桜が植えられていたから、その桜は「右近」に対して「左近」の桜と呼んだと言われています。『古事記』や『日本書記』によれば、垂仁天皇(第11代天皇、在位 BC29～AD70)が多遲摩毛理(たじまもり: 田道間守)に命じて、「ときじくのかぐのこのみ」を取ってくるように命じました。この実は不老不死の木の実だと言われており、一説によればこの木が橘ではないとも言われています。

また、左近の桜については、もともとは「梅の木」が植えられていましたが、その梅が枯れたり焼けたりしたので、村上天皇(第62代天皇、在位 946～967)が桜に植え替えたということです。なぜ紫宸殿の庭に橘と梅(桜)が植えられたのか定かではありませんが、橘は不老長寿の縁起が良い木ですし、黄泉の国に行ったイザナキノミコは腐って醜くなったイザナミノミコから逃げる際に桃の実を投げつけて、ようやく逃げ帰ることができたといえますから、梅の実には霊力があるものとされています。したがって現在でも鬼門にあたる方向(北東)には鬼門除けとして梅の木を植えることが多いようです。

こういった左右に関する間違いは、ひな飾りのお内裏さま(天皇)とおひなさま(皇后)の立っている位置にも言えます。古くからのしきたりをしっかり親から受け継いでいる人は別ですが、多くの若者たちが迷うのも致し方のないことでしょう。この立ち位置は関東と関西では左右が逆で、関東では向かって左がお内裏さまですし、関西では向かって左に立っています。その理由は、むかしは左が上位であり、右が下位だったことによります。たとえば左大臣と右大臣では左大臣の方が偉かったのです。(※1) 明治以降西洋風を取り入れて右が上位となった経緯があって、それで立ち位置が違ってくることから混乱を招いているわけです。

(※1) 左大臣と右大臣

左大臣と右大臣については、当然右大臣の方が上位だと思っている人が多いようですが、右大臣より左大臣の方が位は高かったのです。日本の律令制における中央官庁には2官8省1台5衛府がありました。この2官とは神祇祭祀を司る「神祇官(じんぎかん)」と国政に携わる「太政官(たじょうかん)」をいいますが、この太政官の長官職に太政大臣、左大臣、右大臣、内大臣がおり、官位は正一位から従二位くらいまでの最高位の公家でした。太政大臣は常時置かれたわけではないので、左右の大臣は事実上の最高位でした。そして、左大臣の方が右大臣より上位でした。

現在では一般に左よりも右の方が優先されます。「座右の銘」、「右腕」、「右に出る」などという言葉がありますが、「左遷」、「左前」、「左巻」などと、左の方は良い印象がありません。また、イスラム社会では、「左手は不浄の手」とされて、食事の時も手づかみで食べる際は決して左手を使わないし、歩き出すのも右足からと決まっています。英語の right は「右」という意味だが「正しい」という意味もあります。ラテン語で「右利き」は「器用」とか「利口」の意味があり、「左利き」には「不吉」とか「不幸」の意味もあります。

しかし、この時代では左の方が上席でした。古代日本では、イザナキノミコ(伊耶那岐命/伊弉諾尊)の左目から第一子アマテラスオオミカミ(天照大御神/天照大神)が生まれたとされているように、左の方が上位です。また、左大臣の方が右大臣より偉いのは、古代中国の影響によるものと思われます。これは古代中国の易学からきている「陰陽五行説」の左が陽で右が陰とし

ているところからだという説もあります。一説には、上位の者すなわち左大臣は君主の左側に位置します。君主が座る位置が南を向くから、君主の左は東です。つまり陽が昇る東の方が陽の沈む西より上位だからだと言う説もあります。

現代社会で、基本的には右社会なのは、右利きの人が多いこともその理由だろうと思われませんが、昔の武士や西欧の騎士は刀を左に差していました。その理由は、右手で刀を抜くからです。武士は道路の左端を歩いたのは、左側を歩けばとっさの場合に抜き打ちができるからでもあります。刀が触れあうことを避けるためでした。刀の鞘が触れあうのを「鞘当て」といって、場合によれば果たし合いにもなりましたが、「恋のさやあて」などの「さやあて」はこれが語源です。

西洋でもイギリス騎士も同じ理由で左端を歩きましたが、フランスのナポレオンは左利きだったため、占領地ではナポレオンにならって右側通行になりました。これが現在の交通事情につながって、馬車から車社会になった欧米では車は右側通行になったという説もあります。徒歩や駕籠からいきなり車社会になった日本では、イギリスにならって左側通行になりました。現在英国領の国も、陸続きの隣国などとの関係で、多くの国では車は右側を走るようになりましたが、国境が陸続きではない日本やイギリスは、遠慮なく左を走ることが出来るのです。

(篠井純四郎)